

2012年9月20日(木)

特定非営利活動法人
日本イラク医療支援ネットワーク
〒171-0033 東京都豊島区高田3-10-24
第二大島ビル303 ☎03-6228-0746



NEWS

- 特集：続・シリア危機 P.1~3
医療が危ない！私たちになにができるのか
ある患者さんの家族の風景（1）
アルビルから北へ150km ファーディアちゃんのお家 P.4
【福島支援報告】
福島でどう放射能をかんがえるのか P.5
【イベント報告1】
子どもアースディ福島 in 猪苗代 P.6
【イベント報告2】
こどものいのちをまもりたいフェスタⅡ P.7
鎌田代表のつぶやき P.8
ハウラのミニタオル（生成り色）のご紹介 P.8
局長くん第11話 P.8
お知らせ
クレジットカードでのご寄付の受付を開始しました。
インターネットをお使いの方はぜひお試しください！
<http://jim-net.net/supporters/#donation>

写真：

アーキラ病院のシリア人難民（提供：アーキラ病院）

～特集：続・シリア危機～ 医療が危ない！ 私たちになにができるのか

昨年3月に始まったシリア騒乱では、すでに2万人以上の犠牲者を出しています。しかし、国連監視団も撤退し、紛争はエスカレートするばかりです。この局面で、私たちがどう動くのか、いったい何ができるのでしょうか。JIM-NETのシリア難民支援、『小さくても出来ることをやろう』。前回に引き続き佐藤事務局長の現地報告です。

【ヨルダンにて】

シリア難民たちはヨルダンで医療サービスを受けることができるのだろうか？

UNHCRとヨルダン政府の合意で、難民登録している人たちは、公立病院に行けば治療費の負担はないと言う。しかし、手術とか、特殊な薬が必要な場合はその限りではない。UNに登録しているシリア人は4万人ほどであるが、実際には10万人を超えるシリア人がヨルダンには避難してきており、自己負担の患者も少なくない。病院から、ヨルダン当局→シリア当局へ自

分の個人情報が漏れ、シリアに送り返されるのではないかと恐れて病院に来ない人もいる。

●ヨルダンにできたシリア人のための病院

そこで、いくつかのシリア人による扶助会がアメリカのシリア人などから寄付金を集め、ヨルダンの病院と話をつけて、シリア人専用窓口を設け、治療費を負担している。アンマンのアーキラ病院は、2階のフロア一をシリア難民のために提供することになった。

7月2日にオープンして3日間で50名の患者がきた。ほとんど何もない状態で、手術などは病院の施設を借りている。ここで働くのはシリア人のドクターや看護師達で、彼らも難民だ。

「私は、ダマスカスの病院で働いていました。ホムス出身なので、ホムスの救急野戦病院の手伝いに行っていました。銃で足を撃たれた患者の妻が電話してきた。赤ちゃんのミルクが欲しいと。車でミルクを届けようとしたら、2台の車に止められた。6人位私服の警官が出てきて拘束された。多分はめられたのだと思います。3日間刑務所に入れられた。殴られて、タバコの火をつけられました。『どうして、テロリストの命を救うようなことをするのか』というんです。2m×3mの部屋に7名くらいが入れられました。」



重傷を負ったシリア人男性が、ラマディ総合病院に運びこまれた。

●怖くて病院にいけない患者

入院している患者に話を聞いた。ダラアから2週間に来た男性（47歳）は、甲状腺の手術を受けた直後で、声が出なかったが、一生懸命搾り出すように惨状を訴えていた。筆談のほうがいいのではないかと差し出した紙には、「291」と数字を書いてくれた。あまり読み書きは得意ではないらしい。



数字の意味を聞くと、「刑務所の番号です。一年前に刑務所に入れられた。ダラアの町に兵隊が入ってきて、ドアを蹴破り、テレビを壊した。片っぱしから、男性を捕まえて、目隠しをして、トラックの荷台に押し込めていた。その日は、100人が連れて行かれた。刑務所では、3日間は何も食べさせてもらえなかった。毎日殴られた。2ヵ月後釈放されました。私は甲状腺障害を持っていましたが、その後、怖くて病院にはいけませんでした。病院に行くとダラア出身というだけで、またつかまるかもしれません。それで、ヨルダンに来たのです。」

病院の代表のジャワード医師は、「ここには、戦闘で怪我をした反体制派の兵士も来ますし、風邪を引いた子供も来る。赤ちゃんも生まれる。誰でもが安心して治療が受けられます。」シリア国内のネットワークもあり、ホムスにも薬を届けているという。

JIM-NETは、この病院に超音波エコーなど必要な機材を供与したいと考えている。



写真上：
ダマスカス：アサド大統領の銅像の下で
風船を売る子供たち

写真左：
ダマスカス中心部。数日前テロがあったが、
人々は日常生活を送る。

●イラクにて～ 患者を難民キャンプから病院へ

イラク国内のシリア国境近くにある、アルワリード難民キャンプから毎日のように電話がかかる。

「おなかが痛がっている子どもを病院に連れて行きたい」

アルワリード難民キャンプは、イラク戦争後、治安が悪化し迫害を受けた難民が集められている。2008年から支援をしているキャンプ内のクリニックで鎌田先生が検診をしたことも何度もあった。千人以上いた難民も、アメリカなどが受け入れ現在は270人ほど。しかし、UNHCRが4月半ばに撤退してしまい、状況は最悪だという。



アルワリードキャンプ： 医療が必要な人々

電気と水が止められてしまった。食べ物を買うお金もない難民が多く、食料は国境を越えて取引をしているトラックから分けてもらっているという。私たちが支援していた小さなクリニックも閉鎖され、一番近い病院まで100km。しかしきちんとした検査をするとなると400km離れたラマディイまでいかなければならない。電話では、病気の名前などがうまく聞き取れない。7月11日、アルビルからバグダッドを経由し砂漠をひたすら車で走って難民キャンプにたどり着く。私たちが、テントを訪問すると、次から次にカルテを持って患者が集まってきた。腎臓の痛みを訴える子どもから、皮膚の炎症を起した娘。鬱になったおばさん、神経が麻痺して立てなくなった女の子.....。集まったお金で今まで10人の患者を病院に連れて行き、交通費、治療費を負担した。一回の交通費が400ドルほど。われわれも資金に限りがあり、ICRC（国際赤十字）やUNHCRに支援をお願いするが、シリア難民問題で忙しいのか、ほとんど取り合ってもらえない。

ラマディ総合病院では、シリア難民も入院していた。イラク政府が、シリア難民の受け入れを表明したからだ。42歳の男性は、シリア側のアルブカマルという村に住んでいたが、隣の家が爆撃され大怪我をした。自由シリア軍に助けられ、イラク側に搬送されたが、カーネギーでは治療が出来ず、400km離れたラマディ総合病院に連れてこられたのだ。同行している弟も、いきなりイラクにきて途方てくれるばかりなので、滞在費を300ドル支援することにしたが、残念ながら、翌日男性は息を引き取った。私たちの支援はシリアへの遺体の搬送費へと変わった。男性には5人の子どもがいるという。

私が日本に帰ってからも、毎日のようにSOSの電話やメールが入る。募金の残高をにらみながら、「よし、その患者を病院に回してくれ」と指示を与える。

日本でもオリンピックが終わり毎日シリアのニュースが流れるようになった。フランスのTVがヨルダンの難民キャンプにできたフランス軍の野戦病院を取材していた。難民の一人は、カメラに向かって、いらだちながら「医療支援はいらない。わたしたちに必要なのは武器だ」と叫んだ。軍医は苦笑いした。いや、武器ではない。たとえ、小さな支援でも、命をつなぐことができれば、シリアの未来が見えてくると信じたい。

●戦争で最初の犠牲者は眞実である。

情報操作は、戦争を進めていくために大きな役割を持っています。歴史を振り返ると、湾岸戦争では、クウェートの少女が、「イラク軍が、クウェートに来て病院で赤ん坊を殺している」という嘘の証言が戦争賛成の世論を作っていました。イラク戦争では、米兵士ジェシカ・リンチがイラクに捕まり暴行を受けていたところを、米軍が救出と報道されたことで、士気が高まりました。事実は、リンチさんは、「イラクの病院で、手厚く処置を受けていた。看護師は、歌を歌って、落ち着かせてくれた」と証言しています。「戦争の最初の犠牲者は、真実だ」といわれる所以です。

シリアで起こっていることは、このような情報操作とは大きく違います。子どもたちが殺されているという嘘の情報が出回っているのではないのです。子どもたちが殺されているのは事実なのです。つまり情報操作のために、子どもたちが殺されているのです。

二度とそのようなことが起こってはなりません。そのためには、真実をつなぎ、つむぐジャーナリズムが必要です。おりしも8月21日、ジャパンプレスの山本美香さんが、取材中に非業の死を遂げられたとのニュースが飛び込みました。彼女の勇気ある偉業に敬意を表し謹んでご冥福をお祈りします。

【シリア難民支援について】

JIM-NETでは、4月より現場に入り調査を行ってきました。私たちは難民たちに寄り添い、彼らの声を伝え、必要な支援はその場で決定し、『小さな支援』でも出来る範囲でやっていこうという方法をとっています。おかげさまで、今まで120万円の支援を頂き、以下のような活動を行うことができました。

ヨルダンの都市難民15家族に食糧パッケージ	27,000円
ヨルダンの都市難民にユニクロの古着100着送料	52,000円
ヨルダンでCIDS主催の支援コンサートへ寄付	4,520円
イラク、アルワード難民キャンプの患者支援 10人分	310,400円
ヨルダン都市難民15家族 羊一頭	27,118円
ドミーズ難民キャンプ（北イラク）への薬支援	3,200円
今後予定されている支援	
アーキラ病院に、超音波エコーなどの機材	100万円
イラクアルワード難民キャンプの患者支援継続	50万円

引き続きご支援よろしくお願ひします。

ある患者さんの家族の風景（1）

アルビルから北へ150km ファーディアちゃんのお家

赤尾和美(アンコール小児病院看護師)

7月11日から20日まで、3回目となるイラク訪問をしてきました。これまでの2回は日数も短く駆け足の滞在でしたが、今度こそは、患者さん宅の訪問をして、病院の中では知りえない環境や文化、習慣を少しでも感じ取りたいと思っていました。これは、違う国で活動をする時に、自己満足の活動にしないためにも「絶対に必要だ！」と、私が信じていることなんです！

今回はファーディアちゃんのお話です。ファーディアちゃんのお家は、山間部にありました。アルビルから北へ約150kmのソランという町です。乾燥して露っていますが、今まで見たことがないとても素敵な風景でした。道はとてもきれいに整備されています。そし

て、びっくりしたのが、ソーラー式の街灯。
「わ～！進んでる！」と思わず言ってしまいました。



途中でお菓子とスイカのお土産を購入。大きなスイカで10キロもありました。中は真っ赤で甘そうなんですよ。

そして3時間後にファーディアちゃん宅へ到着。ご家族が優しく迎えてくれました。ファーディアちゃんのはんなりとした笑顔が印象的です。でも、そのかわいらしいファーディアちゃんは、7ヶ月前に急性骨髓性白血病の診断を受けたのです。ファーディアちゃんは12歳。8人兄妹の6番目（双子のお姉ちゃん）で、小さな頃から双子の妹より体が小さかつたのですが元気に学校に通っていました。体の異変が始まったのは7ヶ月前のことでした。耳痛、のどの痛みに続き頭に膿瘍が2つもできました。ファーディアちゃんのパパ



ファーディアちゃん（左）と
双子の妹（右）

は、地元の病院へ連れて行き血液検査の結果、専門の病院へ…とナナカリー病院へ紹介されたのです。診断は、急性骨髓性白血病…。知りたくない事実でした。以来、5回の抗癌治療をナナカリー病院で受けていますが、今も出血傾向は続き、体のあちらこちらに内出血が見られました。「ここにもあるの…」と言つて見せてくれましたが、新しい出血を見つけた時のファーディアちゃんの気持ちを考えると、胸がつまる…。出血があるとなかなか止まらず、家族みんなで、

「止まって…」と祈るばかりで、一番辛い時だそうです。

パパは、学校の先生です。ファーディアちゃんがナナカリーへ治療へ行くたびに仕事を休まなければならず、お給料もその分天引きされてしまいます。土地や家畜、結婚記念の金を売りながら、今までなんとかつなげてきました。でもナナカリーまで行くガソリン代だけで、60-70ドルもかかります。ファーディアちゃんが病気になってからは、パパが「今の私の人生は、病院を中心に回っています」という言葉に表現されるように、家族が一丸となって、ファーディアちゃんの病気と闘っていることが手に取るように伝わってきました。ファーディアちゃんが喜ぶことは、出来るだけしてあげたいと頑張っています。先日はファーディアちゃんを写真屋さんへ連れて行き、こんなかわいらしい写真撮つてあげたそうです。この写真を見てくれたときのファーディアちゃんはとっても嬉しそう。

ファーディアちゃんの体の抵抗力は、簡単に病気にかかってしまうほど落ちています。病気にかかるないようにと、トイレやシャワー室にもとても気を使って清潔に保っているそうです。決してモダンなものではないですが、とてもきれいにお掃除してありました。井戸水も、ちゃんと沸かして飲んでいるそうです。



ファーディアちゃんが、今一番楽しみにしているのは、お友達の訪問です。学校に通えなくなったので、パパは「出来る限り会わせてあげるようにしてあげたいけど、感染のことを考えると制限しなければいけないんだ…」と、葛藤が表情に見えました。でも、家族みんなが、ファーディアちゃんの力になっているようでした。「ファーディアちゃんのために頑張るんだ！」っていう、ポジティブな力を感じました。私もまた患者さんと家族から充電して帰ってきました。すごいな…。

これからまた6回目の抗癌治療にナナカリー病院へ入院です。

～ 赤尾看護師のご紹介 ～

赤尾看護師は、NPO法人フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーに所属し、現在カンボジアで活躍する看護師です。昨年11月よりJIM-NETのアルビルプロジェクトに参画していただいています。

【福島支援報告】 福島でどう放射能をかんがえるのか

佐藤 真紀 (JIM-NET事務局長)/小松 真理子 (JIM-NETスタッフ)

JIM-NETは、福島の子どもたちを放射能から守る取り組みを行っています。その一つがいかに内部被ばくを抑えるかで食べ物に気をつかうこと。安全なものだけを食べる。また、生産者は、安全なものしか売らないことを徹底する必要があります。そのためには、食品に含まれる放射能をきちんと測ることが必要です。

国際協力NGOセンター (JANIC) の竹内さんは、ドナーをつなげ、ベクレルモニターを導入するのに尽力されてきました。現在は、市民による測定所が県内で約30か所あります。「民間が先行したというのは日本の（チェルノブイリと比べて）。現場で測りたいというモチベーションが高かった。その後、福島県が500台ほど（福島市だけでも28か所の測定所）入れたけど、そこで測っている人が必要だと思ってやっていない。ただ派遣会社から来ていたり、「これで測ってもダメなんだよな」と思っている人もうて、測ったことの意味を説明することができていない。」

そこで出てきたのが『放射能リテラシー』ということば。放射能についての情報や知識、そして意識の有無や高低を指して使っています。

「放射能のリスクってなかなか言えない。許容できる度合は個人で違って当然。個人で判断したことを誰も非難できないと思うんです。放射能の基礎知識もあるけど、リスクをわかったうえで、自分の人生を切り開いていく基本的な知恵を福島の人は獲得すべきだ。福島の人たちが勉強して、考えて生きていこうとしているのをサポートしたい。」

そこで、JIM-NETが4月から実施しているのが「放射能リテラシー向上プログラム」。広島出身の小松真理子がJIM-NETに加わり、福島県の民間測定所を訪問し、マップ作りから始めました。それぞれの団体が、障がい者の福祉作業所だったり、農業生産者だったり、子どもを持つお母さんたちの団体であったり。ともかく、福島で生きていくことに前向きな人たちです。かなり専門的に訓練されている団体から、放射能のことはほとんど知らないけれど、ともかく測りたいと意欲的な素人グループなど、様々な知識・意識レベルがありました。そこで、福島市で事故後の早くから測定を行ってきたCRMS（市民放射能測定所）や、他の先達や専門家に技術的な指導をお願いして、放射能測定に関わる人たちの勉強会を企画・実施しています。また、地域ごとに測定所座談会や合同研修会を企画し、悩み相談や情報共有の場とすることで、より一層の「放射能測定文化」を広めていく、放射能に負けないネットワークをつくろうとしています。

市民測定所との話し合いからは、一般市民を対象にした、放射能と生き方を考える講座やワークショップの企画も生まれています。これまでには、東京大学の早野龍五先生によるホールボディカウンターについての講座や、子ども向けのワークショップ、鎌仲ひとみ監督のDVD上映とトーク会などを実施してきました。秋以降は、親子料理教室や、生産・流通・消費者の対話を目標とする農業ダイアログ、また子どもたちにどう放射能を教えていくのか、教育の現場の先生にも加わっていただくシンポジウムなど企画は盛りだくさんです。

これからも、丁寧に放射能測定所とかかわっていく中で、それぞれの団体の活動や農業、福祉作業所の運営といった課題をプロジェクトベースで支えていきたいと思います。

以上は、福島県内の取り組みですが、わたしたちは県外でも同じく「放射能リテラシー」の向上が必要だと考えています。



この夏、広島で「しましまピーチ☆ラウンジ」というイベントを行いました。事前に福島で桃農家さんを訪問し、去年の放射能汚染と風評被害の二重禍・真冬の除染のお話・収穫と放射能測定の様子を取材。測定結果は1kgあたり15ベクレルでした。市場に出荷でき流通する値（基準値は100ベクレル）ですが、確かに放射性物質を含んでいます。

イベント会場には、その桃を持ち込みました。かぐわしいピンクな香りに包まれる中、来場者のみなさんと桃を囲んで、生産者の思いや取り組みを共有しながら「わたし・桃・ふくしま」をつなぐダイアログを重ねました。食べるか食べないかの決断は人それぞれでしたが、いろんな意見を交換する中で、放射能が健康や経済活動に関わる数値として存在するだけでなく、人間関係に影響を濃厚に及ぼしている地元の現状を追体験してもらえたのであればいいなと思います。放射能との長い闘いを福島だけに押し付けてしまうのではなく一緒に立ち向かう様々な方法を模索したいです。



福島の桃とJIM-NETスタッフ小松真理子

【イベント報告1】 子どもアースディ福島in猪苗代

齊藤 信一 (JIM-NETスタッフ)

6月24日に開催された「子どもアースディ福島in猪苗代」の報告を致します。

場所は猪苗代湖北側の丘陵で猪苗代湖が望めます。自家用車で参加された方のほか、福島市からといわき市から各1台、チャーターバスでたくさんの子どもたちがきてくれました。

当日は天候にも恵まれ、開始時刻の10時前には受付に50人位の行列が出来ました。その方たちの受付が終了してまもなく、「いわき市からのチャーターバス」が到着、そして10分後には「福島市からのチャーターバス」が到着。福島市からのバスも、いわき市からのバスも、両方ともバスは満員で、補助席にも子どもたちが座っておりました。そのバスから降りてくる子どもたちは目を輝かせておりました。



いわき市からのバスにのってやってきた子どもたち

本会場では子どもたちが森の探検・クライムウォール・ターザンロープ・ツリーhausなどを楽しんでいる一方、別会場では魚のつかみ取り・サバイバルクッキングが大盛況。子どもたちの中には、狩猟本能を発揮して頑張っている子もおりました。本会場と別会場の往復にチャーターバスも大活躍でした。

私（齊藤）は万が一かるたを担当致しました。万が一、原発事故があつたらどうしたら良いか、その対策が書いてある“かるた”です。私が、「万が一かるたを始めるよ」と声をかけると、数人の男の子が芝生の上にかるたを置くのを手伝ってくれました。かるた 「かるたやるよー！」と齊藤



には20人位が集まりました。
「あわてて 逃げずに 屋内
退避」と私が読み上げると、
‘あ’の絵に向かって二人が
突進！ ほぼ同時の場合、子



かるたに興じる子どもたち

どもたちは自主的にジャンケンを始めます。時には4人の子どもが突進です。衝突して怪我をしないか心配になるほど真剣に遊んでいただきました。途中、女の子を連れたお母さんから、「途中参加でも良いかしら？」と聞かれたので、「ぜひどうぞ」と答えると、その女の子も目を輝かせてかるたを探し始めました。さて、最後の一枚になりました。子どもたちが絵を囲みます。もう危険です。最後の絵は私が取りました。。。 「・・・ちゃん10枚でチャンピオン！」と宣言して終了です。

私の読み手でこんなにも子どもたちが真剣になってくれて、逆に子どもたちから「パワー」をもらいました。

もう一つのJIM-NETブースは「砂のアート」です。画用紙に糊で下絵を描き 赤・青・黄色の砂を掛けます。小さいお子さんも参加できてこちらも好評でした。右の写真は子供たちの作品を乾かしているところです。最後残った砂をシートの上にばら撒くと、子ども達は砂遊びを始めました。



3時になりますとチャーターバスは子どもたちを乗せて帰路に向かいました。子どもたちの顔は満足にあふれていきましたが、遊び疲れて眠そうな子もおりました。さらに終了時刻の4時が過ぎましたら子どもたちの数はだんだん減ってきました。怪我をしたお子様もなく無事終了。私たちはイベントの後片付けを始めました。

この日、夕方まで子ども達は太陽の下で遊びました。「これが本来の子供の姿ですね」と、他の実行委員の方々と話しました。

今回のイベント参加者240名(内、福島からのバスにて54名、いわき市からのバスにて56名)。

福島支援をして頂いた皆様、本当にありがとうございました。



尚、今回のバスのチャーター費用につきましては、テサテープ株式会社様から頂戴した寄付を充てさせていただきました。

【イベント報告2】 こどものいのちをまもりたいフェスタⅡ

西川ヒカリ (JIM-NETスタッフ/スマイルこどもクリニックより出向)

「こどものいのちをまもりたいフェスタⅡ」（スマイルこどもクリニック主催）が、横浜市中区の横浜赤レンガ倉庫で8月28・29日の2日間開催されました。

スマイルこどもクリニックは、横浜市戸塚区で24時間年中無休の小児科診療を行っています。2005年からJIM-NETの参加団体となり、イラク国境の難民キャンプなどを訪問、医療支援などの活動をしてきました。

今回のイベントの趣旨は「こどもの命を守る」ということで、イベントでは、救急救命講習や、イラク難民の話、普段はチャリティーカットをしてカンボジアの学校に寄付をしている美容師さんによるヘッドスパなど盛りだくさんの内容でした。JIM-NETからは、佐藤事務局長、小松真理子（福島支援担当）、イブラヒム（バースラ支援担当）が参加し、それぞれ対談を行いました。また会場には、「アラブのこどもと仲良くする会」、日本国際ボランティアセンター（JVC）、フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーなどのブース出展もありました。

今回、スマイルこどもクリニックが招へいした元イラク難民のゼキさん一家は、2007年にクリニック常任理事の加藤ユカリ医師と知り合いました。当時、一家はイラクの隣国ヨルダンの首都アンマンで暮らしていましたが、長男のアハマド君（当時13歳）は、治療をしないと死に至るサラセミアという血液の難病に侵され、入退院を繰り返していました。彼はお姉さんのアスリーンさんから骨髓を提供してもらい、無事手術は成功しました。その後、米国に移住したアハマド君は、サッカーチームのリーダーや障害を持つ子供のボランティア活動をするまで回復しました。アハマド君は自分の人生体験を来場者に語り、会場に来た人たちに、「夢をあきらめないで、そうすれば絶対にかなうから。希望を捨てないでほしい」と強い思いをこめて伝えてくれました。



病気を乗り越えアメリカでの生活を報告するアハマドくん

ところでこのゼキさん一家は、JIM-NETスタッフのイブラヒムと、とても深い関係にあります。イブラヒムが以前の奥さんを亡くした時、イブラヒムには彼

女が残した双子と、長女ファートマがいました。奥さんの治療のため、仕事などすべて投げ打ってヨルダンにきたイブラヒムには住む家もままなりませんでした。そんな時、ファートマを自分の子供のように受け入れてくれたのがゼキ一家だったのです。5年ぶりの再会を迎えたイブラヒムとゼキ一家の喜びはひとしおでした。イブラヒムは講話の中で、「JIM-NETのみなさんやスマイルのみなさん、またゼキたちのようにたくさんの人々に助けられて今の自分がいる。だから私はJIM-NETの仕事を頑張るんだ」と語りました。現在、イブラヒムはバースラで院内学級の支援や医薬品の受け渡しなどを担ってくれています。バースラではまだ自爆テロなどもあって治安は決して良好ありませんが、

「自分の国が好きだから」と言って自国に残り、危険が伴うなかでも支援を続けるイブラヒムに、会場からは大きな拍手が送られました。

イベント初日には、ルクマン・フェーリ駐日イラク大使もいらっしゃっていました。会場でのご挨拶では、NGOの果たす役割の重要性についてお話しになるとともに、イラク、福島に対するJIM-NETの支援に感謝のおことばをいただき、また駐日イラク共和国大使館は、「あらゆる人々、組織が貢献するための支援を惜しまない」とおっしゃっていました。(駐日イラク共和国大使館HPご参照

<http://www.iraqi-japan.com/embassy/index.php?lang=jp>

イベント慣れしない、いちクリニックの主催でしたが、たくさんの方々のご協力にささえられて2日間を終えることができました。お手伝い、ご参加してくださったみなさまには感謝の意をつくせません。今後も支援へのご協力をよろしくお願ひ致します。



スマイルこどもクリニックのスタッフほかJIM-NETスタッフ、協力者記念撮影

鎌田代表のつぶやき。。。

政府は、2030年時点の原発依存度0%、15%、20～25%の3案について、国民の意見聴取を各地で行なっている。脱原発依存と言いながら、政府は15%を落としどころに考えているようだ。とんでもないことである。2030年0%は、脱原発依存という以上、あたりまえの目標設定である。

ぼくは以前から2020年までに原発を0%にする、という案を言い続けている。ドイツと日本は科学立国、技術立国、貿易立国という同じようなスタイルの国づくりをしてきた。そのドイツが2022年に原発を全廃する。技術や科学力で競争しているドイツが2022年を目標にしているならば、あと8年あれば、日本も原発全廃を行ないながらエネルギーの安定供給ができる、経済の停滞をせず、若者の雇用に水をささないですむはずである。

現政府の日本再生戦略は四百数十万人の雇用を生むといい、環境新エネルギーと医療・健康、農業を3本の柱に考えている。だとすれば、2020年までに原発依存度0%を目標にし、明確な投資を、再生可能性

エネルギーの新しいシステムの開発に重点的に投資をすることが必要なのではないかと思う。

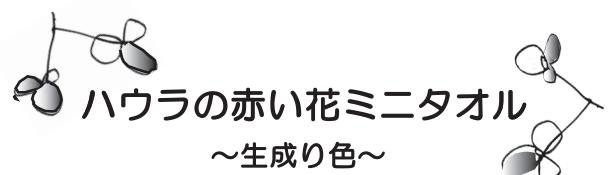
政府のやろうとしていることに心配な点がいくつもあるが、最大の心配は、新しくできる原子力規制委員会の初代委員長として、田中俊一・前内閣府原子力委員会委員長代理を国会に提案していることである。田中さんは、原子力委員会委員長代理という明らかに原子力推進をしてきた学者である。原子力の安全神話を振りまいた学者が、責任もとらず、再び新しい規制委員会の委員長になるというのは、許されるべきことではない。原子力規制委員会の5人の委員の中に、明確に原子力に厳しい考え方を持つ研究者を複数入れるべきである。

福島県のふるさとを奪われた人たちや、今も福島に住みながら不安の中にいる人たちのことを考えながら、日本の新しく進むべき道を作っていく必要があるように思う。

(2012年8月16日)

局長くん

第11話
高橋マリモ



白血病を克服した少女ハウラが描いた赤い花のミニタオル。昨年、出島プロジェクト様のご協力により製作された、真白い生地に赤い花の刺繡が施されたミニタオルをご紹介しましたが、今度は、JIM-NETが新たに生成り色の生地のものをご用意しました。四国の今治で製作されたこのタオルは手触り抜群です！

1枚750円、送料は2枚まで80円

↓ご希望の方はこちらまで↓

JIM-NET事務局

(TEL/FAX) 03-6228-0746

(Mail) info-jim@jim-net.net

お名前・ご送付先・電話番号・

ご希望枚数をお知らせください。



お待ちしております！
記事へのご意見・ご要望、
ぜひお寄せください。
JIM-NET便り
編集後記

JIM-NET便り 2012年 9月号

発行: 特定非営利活動法人

日本イラク医療支援ネットワーク

発行日: 2012年9月20日

〒171-0033

東京都豊島区高田3-10-24

第二大島ビル303

info-jim@jim-net.net

03-6228-0746